

第三百十一回 青葉会

平成二十四年二月二十三日(木) 午後六時〜九時

丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉 今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 久米五郎太 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯 橋口隆

福島正明 山崎亜也

伊賀山そらお 石川清 小川恭延 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 南平和夫

宮内規雄 山内天牛 渡邊盛雄

赤田堅 小川恭延 川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 村田くに子 山崎青史

山内天牛 山本三恵

〈紙上選句〉

《選者吟》

魁けて亡母の盆梅咲く出窓

(青:亡き母上の霊の故か。亡母は「妣」の字を使つたら如何?) (☆:亡母と盆梅で韻を踏む)

ひもすがら春鴉の呼応人語めき

春寒や抱かせてもらふモルモツト

二ヶ月や友チヨコ交はず寡婦同士

帰国の夜卓に所望の目刺光(こり

ゴシックは選者の天
万里子 (紀・一・允・青)

全 (紀・隆・三)

全 (孤・正)

全 (猛・弘)

全 (紀)

《互選句》

八点 ☆ 梅東風や絵皿に溶かす雲の色

一灯 (万・恭・五・弘・敏・ゆ・允・亜)

七点 ☆ 母の忌や晴れて曇りて吹雪をり

紀久男 (万・猛・忠・五・龍・敏・隆)

六点 ☆ 少年のペダル立漕ぐ芽木の風

一灯 (万・堅・弘・ゆ・允・天)

勘九郎襲名興行「土蜘蛛(つちぐも)」

五点 ☆ 戻返る妖僧目付凄味増す

紀久男 (恭・敏・正・く・天)

☆ 長旅の手筈なにかと日脚伸ぶ

堂哉 (万・恭・正・く・青)

(青:長旅となれば準備に忙殺される。日が長くなって助かるというところでしょうか)

☆ 再会を約した日あり春隣

全 (恭・忠・隆・く・三)

☆ 春浅し江戸千代紙の刷りのむら

正明 (万・孤・ゆ・一・く)

☆ 少しづつ消えゆく未来梅一輪

盛雄 (堅・紀・孤・五・正)

☆ 四十年着馴れし襦袢(とてき)ほつこりと

紀久男 (万・ゆ・一・天)

一年の計手つかぬままに二月かな

隆 (堅・猛・ゆ・天)

春雨や梅林の店はや閉ぢて

五郎太 (堅・亜・三)

☆ 墓地抜ける帰路あり谷中春の雪

弘子 (龍・く・亜)

☆ 眼病み手放すライカ雁帰る

一灯 (万・敏・正)

(正↓中七「ニコン手許に」)

落ちさうな春の真珠のイヤリング

正明 (忠・五・亜)

☆ 露味噌を酒の肴に処世論

昇 (龍・敏・隆)

☆ 恵方巻てれ笑ひして亭主買ふ

天牛 (万・隆・亜)

(☆上五↑下五)

風花の奥に物の怪潜みおり

盛雄 (忠・孤・五)

富士を背に丹沢坐して戻返る

清 (堅・一)

☆ 碁敵と石打つ音や春近し

全 (猛・允)

☆ 春大雪越(こし)の山野を浄めんか

紀久男 (孤・五)

☆ 風疹(ふうじん)く足音響かせ夜半(よむ)の道

猛 (堅・亜)

☆ 草青む汚染を測る通学路

忠彦 (恭・弘)

☆ 浅き春水面に投げし釣糸(いと)光り

五郎太 (万・天)

(☆↓浅春や。r早春や)

五郎太 (万・天)

(☆↓浅春や。r早春や)

紅梅に見とれ見知らぬ墓の前

(青：見知らぬ墓が面白い)

球春や伸び代大き若人ら

(青：伸び代とは言い得て妙：辞書にはないが良くわかる)

春愁や割箸斜めに割れてより

(☆↓斜(はず)に)

貝寄風の磨きし砂紋光りをり

(☆↓母の住ひに独り寝て)

☆ 虎落笛母住む家に独り寝る

薩摩路を春行く旅や桜島

病院の窓

病院の窓

緩やかに流れ行く雲冬の空

震るるや珈琲の香り居間に満ち

(青：美味そうなコーヒー。充実した時間が思われます。)

春立つも寒し寒しが口癖に

手の平のスマフォと興じ春の雪

(スマートフォン)

西山松之助先生お別れ会

献杯や白寿の遺影華ぎて

待ち伏せの余寒攻め来る首筋に

冬空に陽をあびユラリ断雲(らぎれぐも)

春空を背に婦人の影過る

日の光窓辺に満ちて春立ちぬ

三椏(みつまさ)や固き蕾の陽にほどけ

☆ 排水はすつかり洗ひ春立てり

春の雪伯爵夫人の墓凜と

春禽や今朝の陛下を休ませよ

(小鳥の綺麗な声ではなく、うるさい鳴き声の由)

佇むや春なほ浅き留守の門

春愁や鍵盤の指もどかしく

(青：昔ピアノを習っていた身にはよく分かる句)

うぐひすの小さきが初音愛らしく

梅一輪香り仄かに夕日蔭

茜さす薄暮の岬野水仙

神の手にすべて預けて御代の春

手際良きバイパス手術凍てゆるむ

凍林や体調きかれ順調と

看護婦の唄ふが如き冬病棟

清明の絵巻辿りて城市(まち)に入る

鬪鶏や薙で圍ふ修羅の色

洗濯屋に出す物のなし冬籠

弘子 (隆・青)

健介 (紀・青)

恵洲 (一・三)

一灯 (ゆ・允)

隆 (万・龍)

全 (恭・弘)

規雄 (猛・忠)

そらお (青)

全 (猛)

清 (三)

紀久男 (敏)

猛 (正)

全 (紀)

恭延 (く)

全 (紀)

五郎太 (龍)

弘子 (万)

全 (く)

全 (紀)

恵洲 (一)

堂哉 (青)

ゆたか (龍)

全 (允)

一灯 (孤)

隆 (弘)

正明 (紀)

和夫 (紀)

規雄 (三)

亜也 (く)

全 (天)

天牛 (忠)

● 次回青葉会

三月二十二日(木) 午後六時〜九時

(丸紅 談話室)

▲当季雑詠各自五句。投句は二句

四月二十六日(木)

五月二十四日(木)

平成二十四年二月句会報

一 今回は先生以下11名出席。投句も11名。恭延さん天牛さん残念乍ら今月も欠席で、一寸淋しい句会になりそうな気配でした。しかし、先生寄贈のつまみ(米国製)とおからケーキ(吉祥寺)、弘子さんのベルギーチョコ(WITAMER)と能登銘酒「池月」、亜也さんの純米大吟醸「喜楽長」(近江)、小生の「張鶴・雪」一升壺を賞味し乍ら始まりますと、呑む程にいつもの当会らしくなつて参りました。

回覧した西山松之助東京教育大名誉教授の遺著『あそびと江戸学』に触れられている加藤楸邨について、楸邨と草田男との交流、そして日経紙に三週連載(日曜)の草田男と伊丹万作との交友について話題になりました。いつもの弘子さんの披講と合評の進行役で快調に推移。一灯さん、正明さん、盛雄さん、堂哉さん、小生が好成績でした。

二 関係者近詠

霊長類ヒト科の吾が冬鏡 万里子 幼き日椿の蜜を吸ひにけり 規雄
野良猫と目瞑る寺の冬日向 全 朝日俳壇2月27日 稲畑汀子選

ふるさとに恩師と囲む牡丹鍋 全 初雷や朝のコーヒー句ひ立ち 允章
大きい字の聖書を求めて待降祭 眞希子 除染されし公園の木々冴返る 全

マスクして素顔の軽さ図書館へ 全 湯の町の店閉める噂梅まつり 全
恋ならむマフラー長く長く編む 全 嫁がせて小さき立雛残りけり 恵洲
寝かせ売る古人形や銀杏散る 弘子 湯気上ぐる裸祭の二月哉 全

枯木立向かうへ今朝も急ぐ人 全 立たされし想い出寒き古校舎 全
胸に当て消す残響聖夜のハンドベル 全 大鉄会2月

少年に一役重し降誕祭 全 啄木鳥や森深ければ森応ふ 孤舟
冬茜コンピナートのシルエツト 恭延 秋駒の点となりゆく大草原 全

小春日や海豚の飛びて孫の跳ね 和夫 しぐるるや出家ごころの捨て切れず 全
山焼きの煙棚引く久留里線 全 淡き日を曳きさ走りのみそさざい 全

年の瀬を江戸浄瑠璃の澁きへと 紀久男 背負ふべきもの未だ知らず青鷹 全
聖誕祭入るや渦巻くハーレルヤ 全 「爽樹」3月号

暁替妻の寝顔はそれでよし 忠彦 豊穽な能登を眼下に鷹渡る 盛雄
冬空や心を隠す雲もなく 全 奥能登のキリコ祭礼秋深む 全

春立つや岬の空より鳶の笛 允章 落ちて行く源氏の主従いなつるび 全
階下より犬に呼ばれてゐる朝寝 全 秋雨の中へ旅立つ妻の背や 健介

異国でも蒙る災や秋出水 全 秋鯖や花折峠の苦難の史 全
「季流」1月号

三 最近目についた句と恵洲さん推薦の本の紹介 全 ふるさとは母のにほひや凍み大根 黛まどか
蜘蛛に生れ網をかけねばならぬかな 虚子 寄席帰り切山椒を家苞に 黛まどか

糞ころがしと生れ糞押すほかはなし 楸邨 全 生きることは一筋がよし寒椿 五所平之助
野馬追も少年の日も杳かなる 楸邨 全 「俳句界」1月号

火の柱の火の壁の松明あかし 兜太 全 2月13日『恋』(朝日)
酒さめて千鳥のまこときく夜かな 井月 全 2月29日『私の履歴書』佐久間良子(日経)

●岸本尚毅『生き方としての俳句 句集鑑賞入門』三省堂2012/1/15 ￥1,800

戦前から戦後にかけて「ホトトギス」で活躍した30数名の句集を紹介。今は忘れ去られた俳人に光を当て、再評価に力を入れている。小生好みの句を列記します。

豆籬の目鼻ゑがきて世を送る 岡本松浜 下りかゝるつばさを張りし雲雀かな 皆吉爽雨
大いなる春日の翼垂れてあり 鈴木花蓑

平成二十四年三月十二日 紀久男記